

地図とコロニアリズム：松浦武四郎の蝦夷地「探検」

KOMEIE, Shinobu / 米家, 志乃布

(出版者 / Publisher)

Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University / 法政大学比較経済研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

比較経済研究所ワーキングペーパー / 比較経済研究所ワーキングペーパー

(巻 / Volume)

107

(開始ページ / Start Page)

28

(終了ページ / End Page)

30

(発行年 / Year)

2002-03-15

地図とコロニアリズムー松浦武四郎の蝦夷地「探検」ー

米家志乃布(第一教養部)

1. はじめに

◆地図史研究の動向

◇織田武雄著『地図の歴史 世界編』、『地図の歴史 日本編』、講談社新書、1974年など

→地図発達史的視点、科学的・近代的地図への「発展」史

◇葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』、地人書房、1980年、久武哲也・長谷川孝治編『地図と文化』、地人書房、1985年など

→「絵図」と世界像の関係、地図と文化の関係(世界図、国土図、地域図)

◇Harley, J. B., "Maps, knowledge, and power" in Cosgrove, D and Daniels, S. eds., *The iconography of Landscape: Essays on the Symbolic Representation, Design and Use of Past Environments*, Cambridge University Press. (ハーリー「地図と知識、そして権力」千田稔ほか監訳『風景の図像学』第14章、山田志乃布訳、2001年) 1988年

→地図と政治的権力との関係を重視 そのさい、地図を「言語」とみなす、地図を「知識」あるいは「権力」の一形態とみなす

◆日本の北方図研究

秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』、北海道大学図書刊行会、1999年

・小縮尺の地図が中心 如何に「正確」に実際の土地輪郭を描いていくようになるのか

・ヨーロッパ人、ロシア人、日本人などによる「探検」と「地図」の関係→日本北辺の地理の解明

⇒「実測図」が作製されていくプロセスが重要視される

◆報告者の問題関心

「19世紀日本北方を対象とした地域情報の構築とその利用」科研費(奨励A)平成13・14年度

①地域図の解明→実測図の存在した時期においても絵図や風景画が存在したことの意味を検討すること

②植民地支配の道具としての「地図」の役割を考察すること→地図情報の構築と利用のあり方

今回は、②について若干の事例から検討してみたい。

◆留意点

いわゆる「蝦夷地」から「北海道」に地名が変更され、国郡制・国境などの「境界」が引かれ、当該地域が「国民国家」に編入されていく…という単純な図式のみ、で論じるのではなく、開拓使設置以前の第2次幕府直轄期の蝦夷地における情報収集と活用が如何に行われ、それが後世においてどのような意味をもつのか、幕末以降の「地図」にみる情報活用のあり方にも注目してみたい。そのさい、幕末蝦夷地においてもっとも多く情報を収集、出版した松浦武四郎の仕事に着目する。

◇なぜ、幕末か?

幕府直轄期は、それ以降の開拓使・北海道庁に連続する、アイヌ民族への同化政策をおしすすめる契機となった時期である。その場合、特に第2次幕府直轄期(安政開港以降)に注目する。

2. 松浦武四郎について

◆経歴

- 文政元(1818)年 一志郡須川村(現三雲町小野江)に郷士の4男として生まれる
天保元(1830)年 津藩平松楽斎の塾に学ぶ 16歳で退塾し江戸へ行く
天保5(1834)年 諸国遍歴の旅にでる 翌年江戸にて出家
文政14(1843)年 平戸・光明寺の了縁師に詩歌・絵画を学ぶ
弘化元(1844)年 還俗して蝦夷地をめざす
弘化2(1845)年 初航(28歳)①
弘化3(1846)年 再航(29歳)②
嘉永2(1849)年 三航(32歳)③
嘉永7(1854)年 「三航蝦夷全図」完成
安政2(1855)年 幕府雇となる
安政3(1856)年 4回目 廻浦日記(39歳)④
安政4(1857)年 5回目 丁巳日誌(40歳)⑤
安政5(1858)年 6回目 戊午日誌(41歳)⑥
安政6(1859)年 「東西蝦夷山川地理取調図」完成 結婚
「蝦夷漫画」刊行 蝦夷地御用雇を辞職
明治2(1869)年 開拓判官に任命される 北海道・国郡名の選定
明治3(1870)年 官職・位階を辞す
明治21(1888)年 東京神田五軒町の自宅で死去(71歳)

◆松浦武四郎の研究史(別紙コピー参照)

近年の研究動向では、松浦武四郎とアイヌの関係を重視することが多い
→松浦のアイヌ民族への深い理解を評価する

3. 松浦武四郎作製の地図～「東西蝦夷山川地理取調図」

◆「東西蝦夷山川地理取調図」の概要と特徴

経緯度各1度をもって1枚とした切図, 28冊の折畳図 木版色刷 安政6年出版
ケバ法を用いる 地名の詳細な記載

◆地図史上の位置づけ

「…輪郭においてもっとも正確であるばかりでなく、内陸部の記載においてもこれまでに例のない詳細な地図となり、北海道地図の作製史に一時期を画するものであった」(秋月(1999)より)
→沿岸部分は、従来の伊能図・間宮図(「沿岸図」)を利用し、内陸部の記載についてはオリジナルのため、非常に評価が高い。

◆アイヌの人々との協力

アイヌに案内を頼む→「案内土人名簿」 実際に行ったことのない場所についてはアイヌから聞き取りを行った。

4. その後の地図の活用

◆主要な出版図

「北海道国郡全図」木版色刷 1869年
大学南校「官板実測日本地図」(蝦夷諸島)木版色刷 1870年

◆開拓使期における利用

多くの地図に利用されたと思われるが、『開拓使顧問ホラシ・ケプロン報文』『来曼氏北海道記事』には、実際にライマンが松浦の地図を見ながら、測量を行っている様子が窺える。

ライマン「日本蝦夷地質要略之図」石版色刷 1876年

従来の研究では、松浦の地図の不正確さを近代的な測量でもって塗り替えていくという作業を評価する論文が多い。しかし、松浦の地図があつてこそ、の作業であつたともいえるだろう。

5. おわりに

◆地図の思想

・地図情報の特性→(1) 図像であること(2) 繰り返し利用されていく→同時代もしくは後世の人々の地域像・空間像に及ぼす影響は多大である。

・「科学的な『地図』は現実空間の反映である」という考え方の再検討が必要→真実でもないし、偽りでもない。その内容の選択性や表象を通して、人間世界を構築する一方法である。

・「描かれていること」だけでなく「描かれていないこと」の意味

◆松浦武四郎の仕事について

松浦武四郎自身が、意図していたかどうかにかかわらず、彼の膨大な仕事は、同時代および後世の人々の地域像・歴史像に多くの影響を及ぼしている。その意味で、本人の意図とはにかかわらず、彼の作成した地図もまた、「北海道」支配のひとつの道具として、機能していたことが想定できよう。といつても、松浦は、「幕府御雇い」として仕事をしていたのであり、今後は、彼自身の考えを慎重に再検討していくことも必要である。